東日本大震災　学童保育の一日も早い復旧・復興を願って④

いわき市学童保育の復興に向けた取り組み

鈴木　玉江
いわき市学童保育連絡協議会・事務局長

いわき市には、学童保育が四四か所あり、すべて民営（主に市からの委託）で運営されています。保護者会運営は二四か所あり、そのうちの二〇か所の学童保育がいわき市学童保育連絡協議会（以下、いわき市連協）に加盟しています。

三月一一日、大地震がいわき市をおそいました。直後に、沿岸部には津波が押し寄せ、地区によっては火災も発生し、さらには放射能……。これでもかというほどの災害の中、市内の各学童保育は、可能なかぎりすみやかに保育を開始しました。

保護者の方たちから、「本当に、助かりました。指導員の先生方にも、家族がいらっしゃるのに、ありがとうございます」との感謝の言葉が寄せられた学童保育もありました。

いわき市では、地震や津波の被害や放射能の影響で、震災直後、四か所の学童保育施設が使えなくなり、急遽、開設場所探しに奔走することになりました。しかし、市内の被災した方々はもちろん、原発から三〇キロ圏内で被災した他市町村の方々が避難してきているため、住宅が足りません。どこも、開設場所探しには苦労しました。物件探しで相談していた不動産会社の社長さんが見かねて、「妻が朝八時に出勤した後、夕方五時に帰るまでの間、我が家の一階を使いなさい」とおっしゃってくださり、その言葉に甘えさせていただき、ご自宅をお借りしている学童保育があります。

その他にも、元々開設していた小学校が一五キロ離れた別の小学校内に移転し、その近くの大学の建物を借りることができた学童保育、保護者の親族のご自宅を借りて開設している学童保育、震災後は休所していたが、公民館の建物（当初は、避難所になっていた）で七月二一日から再開にこぎつけることができた学童保育など、さまざまです。

また、震災後三か月たってようやく生活が落ち着き、夏休みをどう過ごすのかみんなで考え出していた矢先の六月になって、敷地内の放射線量の値が高いことがわかり、突然の引越しを余儀なくされた学童保育もあります。

これからどんな問題が出てくるのかと、まだまだ不安と心配がつきない日々をおくっています。

子どもたちは大地震を経験し、また、目に見えない放射能と向き合わなければならない状況におかれています。

夏を迎え、暑い毎日ですが、放射能の影響を考えて窓を閉め切った状態で保育を行っています。しかし、クーラーがない学童保育もあり、室内で遊ぶことにも限界があります。

ある学童保育では、保護者の了解が得られれば一時間だけ外遊びをしていますが、「外遊びは控えてほしい」という保護者もいます。

さまざまな制約の中で過ごしている子どもたちの心中を思うと、指導員としても対応に苦慮したり、やりきれない思いにもなりますが、こんな状況でも、お互いに相手を思いやり、気遣っている子どもたち……。

そんな中、全国の学童保育関係者の皆様から寄せられた義援金をもとに、いわき市連協が中心となり、「東日本大震災緊急支援プロジェクトinいわき」を立ちあげ、いわき市内のすべての学童保育への支援活動を展開していくことになりました。

さらに、「未来を築く子育てプロジェクト・東日本大震災『緊急支援プログラム』」の助成も受け、具体的な支援が始まりました。

六月一三日～一五日の三日間の日程で、西東京市立ひばりが丘児童センター長・高橋ヨシェさんにきていただき、講演会を開催して、「震災を体験した子どもたちの心に、指導員はどう寄り添っていけばいいのか」を学ぶことができました。

七月六日～七日には、全国学童保育連絡協議会とともに市の担当課との懇談を行うと同時に、被災した学童保育への個別の支援策といわき市連協としての取り組みについて、相談をさせていただきました。

私たちは、各学童保育で必要な備品などを取りまとめ、緊急時に必要な飲料水・懐中電灯・ラジオ等を配布しました。また、「子どもたちに思い切り外遊びをさせよう」と、夏休み中の遠足の計画をたてています。

元々の施設が使えなくなっている学童保育（五か所）へは、安心して子どもを預かることができる場所が確保されるよう大至急、支援するとともに、そのほかの学童保育も含めて、クーラーを設置することなど、できることから取り組んでいます。

また、県内の学童保育関係者が協力して学童保育の復旧・復興に取り組んでいくためにも、県連協結成に向けた取り組みを進めていければと考えています。

全国の皆様が私たちに寄せてくださった大切な愛を記憶し続け、感謝申しあげます。